


0. 報告日：2012年 4月 5日（木）	
1. 訪韓期間と場所：2012年3月25日（日）～3月31日（日）、韓国：ソウル・江陵等	
資料 作 成 者	<p>（所属、学年） 大分大学大学院工学研究科 建設工学専攻博士前期課程1年 （氏名） 青柳 直希</p> <p>2. 交流・調査の着眼点 空間のもつ特性とそれによって感じる事 またその空間の景観面での位置づけや利用方法</p>
3. 調査記録（7.5 頁程度）	
<p>■2012/3/25 ソウル市(再開発地区、北村、清溪川、京福宮、南山タワー)</p> <p>ソウル市全体の印象は高層ビルが高密度で立ち並んでおり、都市外からみると美しいスカイラインとして景観を形成していたが、都市内からみると、迫力を感じさせるものだった。生活利便性向上のために、路上には情報端末機などが設置されていたが、メンテナンスがされていないためいくつか不備がみられた。</p> <p>清溪川は 1978 年までに衛生や景観面の改善の工事のため一時は完全に地下に埋まり、そこには高架道路が存在することになったが、歴史・文化及び環境都市ソウル実現のため、再び姿を現した。実際に歩いてみると、環境保全の中心および住民の憩いの場として存在しており、人口整備された川の成功例だと感じた。はじめは草、木、土で整備したほうが、環境面ではいいのではないかと思ったが、コンクリートで整備されているからこそ、衛生的に保たれており、景観面では周辺環境と調和がとれているように思えた。また、図1下段のように半屋内空間も存在し、一つの空間で明と暗、開と閉(広と狭)を感じる場となっていた。</p> <p>北村は、韓屋が残存する伝統ある景観を残している地域であった。歴史ある建物だけでなく、現代的なカフェなども存在し、伝統と現代が共存していた。路地空間には多くの店や住居の入口が面しており、生活感も溢れだしていた。若干、色彩の多様性は気になったが私は景観、生活、両面においてバランスの取れた地域だと感じた。ここでは、ソウルの伝統ある街並みの構成や韓屋の外装等を学ぶことができた(図2)。</p>	
	
	
<p>図1 清溪川</p>	
	
<p>図2 北村</p>	



図3 京福宮

京福宮は、周囲が塀で囲まれており、その空間自体が壮大なものであった。門など復元されたものが多いが、それでも空間に足を踏み入ると異次元に移動した錯覚を覚えた。

景観面では、背後に存在する山などの地形だけでなく、周囲に立ち並ぶ高層ビルとも調和がとれていた。一つの視点場からでも、360° 視界を変えることによって、風景が変わった。近代と伝統が混在する景観を形成していた(図3)。

南山タワーはタワー自体もソウルの景観形成において重要な役割を担っているが、タワーから都市を眺めることによって、より客観的に都市に目を向けることができた。方角によって建物の高さ、密度に差があった。都市内にいると大規模な緑地が存在することをあまり認識できなかったが、実際には多くの自然と建築物によって都市が形成されていることを改めて感じた(図4)。

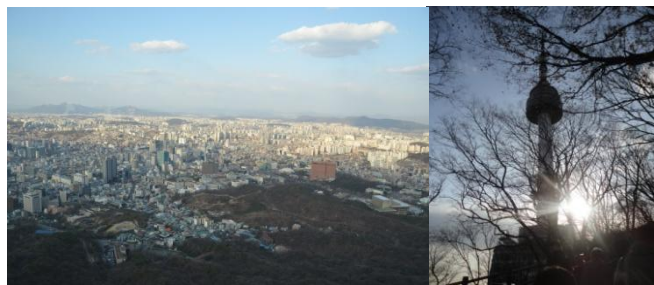


図4 南山タワーからみたソウル市と南山タワー

■2012/3/26 ソウル市(coex、I park、タワーパレス)

coex の敷地内に入ることはできなかったが、周辺環境に関しては、建物密度が思ったよりも小さく、道路幅が広く、またセットバック等もされており、圧迫感は感じられなかった。I park、タワーパレスもどちらも超高層ビル(高級マンション)であり、敷地内にはいることはできなかったが、敷地外からでも、その存在感は感じる事ができた。タワーパレスに関しては、図7の視点場からの景観は川、木々、空、建造物と自然と人工物がよい景観を生み出しているが、もっと近い視点場からの景観は、他の高層ビル群と違いがないように思えた。



図5 coex



図6 I PARK



図7 タワーパレス

■2012/3/27 江陵市(江陵原州大学校)

江陵原州大学校との研究交流会では、研究発表を英語でプレゼンテーションし、また江陵原州大学校の学生の卒業作品や研究内容を紹介していただいた。私の研究内容が離島地域であり、海外の大都市で居住する方々に意見をいただく貴重な体験ができた。質問内容に関しては、どの場所でも存在する交流活動についてが多く、改めて、建築、都市計画を考える上で、「交流」は必要不可欠な問題であると思った。江陵原州大学校の学生の卒業作品や研究内容については、都市全体をしっかりと見つめ、それに対しての問題提示や解決方法を紹介していただき、大変参考になったので、これからの研究に生かしていきたいと思った。また、英語によるコミュニケーション能力の重要性を改めて感じた。



図8 江陵原州大学校での研究交流会の様子

■2012/3/27 江陵市(鏡浦臺、船橋荘、烏竹軒)

鏡浦臺は水、山など風水を非常に意識した場所であった。もともとは異なる場所にあったらしく、当時の王様が移築を命じたようである。天井の柄や色彩(赤、緑、青、黄色を基調とする)が美しかった。この空間に足を踏み入ると、自然と月を見ながら杯を持つ王様の姿を想像することができた。

また近くの仮設事務所にて鏡浦湖周辺の自然共存型の開発計画の内容を役所の方々にプレゼンテーションしていただいた。内容としては、自然エネルギーを利用し、人と自然がともに暮らすという計画であった。しかし、自然共存の際必要不可欠な生態系の問題提示がされていなかったため、質問させていただいたが、渡り鳥の居場所をつくることを考えているという回答をいただいた。生態系の問題解決は大変であるが、それを実現することができたら、人間と動植物またそれらを取り巻く自然が共存できる計画になるのではないかと思った。進捗状況は、図9真ん中のようにまだ工事は進められておらず、計画段階であった(視察時)。



図9 鏡浦臺と鏡浦湖周辺および計画の内容を聞く様子

烏竹軒は、韓国の紙幣である5万ウォンと5千万ウォンに載っている申師任堂（シン・サイムダン）とその息子の栗谷李珥(ユルゴッ・イイ)に縁のある場所である。名前の由来は図10右のように烏竹軒の周りに生えている黒い竹であることを知った。韓国も日本と同様に、その土地や周辺環境から名前がつけられた建造物も多いようであった。

また、韓国の建物設備では有名なオンドル(床暖房)の正面と裏側の煙突の高さの違いが気になった。裏側の煙突が低い理由は、大抵建物の裏側は雑木林など、虫が多い環境になっているため、煙突から出る煙を利用し、虫を寄せ付けないためであることがわかった。オンドルは昔の人の生活知恵が詰まった設備である。

図10左の門は、自警門というが、これは祖母を二度と自分のせいで泣かさないと誓い、自分を戒めるという場所という意味から名前が付けられたようである。



図10 烏竹軒

船橋荘は韓国古来の生活様式について学ぶことが多かった。一つ目は、男女の区分がはっきりしていることである。敷地内に入るための門も男女別となっていた。女性の門には外から中を直視できないよう、図12右のように板が作られていた。二つ目は身分による居住環境の違いである。訪問客に対して、大きく3つ建物に区別されていた。図11左は身分の低い方用の部屋がある建物である。低身分の方用とはいえ、十分なスペースが確保されていた。現代の建物と比べると、地表面と生活空間に大きな段差があり、両開き扉のため入るときに不便さを感じた。図11右は最も身分が高い方をもてなす建物である。また、周囲は松林が囲まれており、囲繞感を生みだしていた。風水を意識した建造物であった。



図11 船橋荘の敷地内の様子



図 1 2 船橋荘(全体像と女性用の門)

■2012/3/28 太白市(太白山)

太白市は太白山のふもとにあることから、自然に恵まれた都市であり、また石炭産業で栄えた都市ということもあり、景観の面では他の都市と大きく異なっていた。公園内にある池も透明度が高く、住民たちの憩いの場としての役割を果たしていた。

太白山は、風水思想において非常に重要な役割を果たしている。登山してみると、頂上部にはいくつか祈壇があり、とても神聖な場所であることを改めて感じた。また、日本同様、四季によって山自体だけでなく景観を形成する一つの要素としても、その姿は変化する。



図 1 3 太白山山頂からの眺め

■2012/3/28 安東市(三亀亭)

三亀亭は風水思想を取り入れた亭であり、亀の石が三つあることから名づけられた。

低い塀が周囲を囲んでいるが、外からみると一見あまり意味がないように思えたが、実際に敷地内に入ると、その塀によって周辺環境と亭の間に境界が生まれ、神聖な空間を生み出しているように感じた。

また、敷地及び建物自体が小さくても、圧倒的な存在感を有していた。

亭は床、柱、屋根だけで構成されているが、それ故、視界を隔てるものがなく、景観としてその建物が目立ちすぎないため、周辺環境とうまく調和されているのではないかと感じた。屋根の反りや、六角形の柱など細部まで手が施されていた。



図 1 4 三亀亭

■2012/3/29 安東市(河回マウル、屏山書院)

河回マウルは瓦葺き、藁葺きが良好な状態で保たれているなど多くの文化財を有し、現在も両班の子孫が伝統を受け継ぎ暮らしている。また河回別神グッ仮面劇など、建築、文化慮面においても伝統を残す貴重な村である。村全体が重要民俗文化財であり、2010年には「世界文化遺産」にも登録された。図15左のように顔が掘られた置物がたくさん置いてあった。これは村の入口にあり、魔よけとしての設置されている。図15真中はオンドル用の薪である。伝統の生活様式を継承しているため、現在も薪から火を起こして利用している。また塀の壁には石や瓦が埋め込まれており、強度だけでなく模様としても変化を生みだし、伝統ある景観の一つとして現存している。



図15 河回マウル(入口の様子、薪用倉庫、塀の様子)

建築物は図16左の御神木(約樹齢600年)を中心に洛東江に向かって配置されている。

建築の使用形態としては、船橋荘同様、男女や身分による違いで使用する建物が変わって区。基本的には、塀の中にコの字型に母屋、仕える人達用建物、馬小屋、倉庫などが配置されていた。現代よりも使用建物の区分がはっきりしていたことがわかる。



図16 河回マウル(御神木と建物配置、馬小屋)

景観面では、村内、村外からでも瓦と藁の屋根がバランスよく共存しており、土の道や周辺の自然環境とうまく調和していた。自動車が普及するにつれ、道路整備が行われ、一部コンクリートも存在しているのは残念であった。

また背後の芙蓉台(図17左)は圧倒的な存在感があり、河回マウル、洛東江とともに壮大な景観を形成していた。



図 17 河回マウル(芙蓉台と村の様子)

屏山書院は私立の教育機関であり、風水思想を取り入れた場所である。今回の調査の中で、建築が人間の精神におおきな影響を及ぼすということを最も実感した場所であった。

建物配置については周辺環境との距離感をうまくコントロールしていた。晩対楼では、間近にそびえ立つ屏山と洛東江によって自然の雄大さを感じる。一方、立教堂(教室的役割)では晩対楼(学生たちの休憩場的役割)があることによって、自然が程よい距離に存在し、それに加え書院内の生活感(人の動き等)も感じることができる。

建築物に関しては、立教堂は目上の先生が居る場所ということもあり、東棟、西棟(寄宿舍)など他の建物より、高い位置に立っていた。また3つ扉は風を通すだけでなく、背後の景色を切り取る額縁の役割をはたしていたそうである。晩対楼の柱も同様な役割を果たしており、7つの額縁を形成していた。晩対楼については、上段と下段の柱の太さと形が異なっていた。上段は直線であり整理した哲学的なもの、下段は木本来の形を残した自然的のものを表しており、素材のみで建築の意味を表現していた。また釘を使わない木造建築物であり、床も一枚一枚スライドさせてはめ込むという、工法においても珍しい建築物であった。全体から細部まで私の建築観に影響を与える建築であった。



図18 屏山書院の様子

■2012/3/29 報恩郡(俗離山法住寺)

俗離山法住寺は韓国唯一の木造五重塔が存在する。下段に連れて面積が大幅に大きくなり、日本の一般的な五重塔とはデザインが若干異なる。構造としては、基本的には軸組構造であるようだ。日本の五重塔には心柱(通し柱)がみられるが、捌相殿は途中で継がれている。高層ビルにもいえることであるが地震が少ない韓国ならではの構造であるのかもしれない。周囲の山々によって寺院独特の厳格な雰囲気を生み出しているように感じた。



図19 俗離山法住寺の様子

■2012/3/30 大田市(ハンバット大学校、大田開発研究院)

江陵原州大学校同様、離島についての研究発表をさせていただいた。ハンバット大学校の先生にもご講評いただいたので、これからの研究生活の糧にしていきたいと考えている。

■2012/3/31 釜山市(ヌリマル APEC 하우스 I park、シネマセンター)

都市全体としては、高層マンションや近代建築が集積されていたが、敷地の周辺は緑化されている傾向がみられた。また海に面した都市であるため、港及び海岸整備もされていた。日本と比べて、奇抜な形状の高層ビルが多く感じられたが、これは地震が少ないという地理的性質も大きく関係していると考えられる。I park に関して、現代的な建築が立ち並んでいたが、近くに目を向けてみると、釣りをしている人や、海女さんが海辺で休憩するなど、生活感も溢れ出ており、大都市においても建築と人々の生活は共存していることを改めて感じた(図20真中)。



図20 シネマセンターと I park

4. 全体の感想と今後の抱負(半頁程度)

【視察について(現代建築および大都市、伝統建築)】

高層ビルや大規模建築に囲まれた大都市ほど、川や緑地といった自然を含んだ空間が必要だと改めて感じた。これは人々の生活だけでなく景観にとっても大切なことである。

日本でも伝統建築をみたことがあるが、今回の視察では、伝統建築だけでなく、その中で伝統的な様式で生活を送っている方々をみるという貴重な体験ができ、理解も深められた。

また今までは建築を外観、内観等の意匠や動線等の利用する人の利便性、快適性に注目して勉強し、その問題をクリアすることがよい建築や空間であると思っていた。しかし今回の視察で、よい空間づくりのためには、建築単体でなく周辺環境との関係を考慮することや、外から建築をみる視点と建築内からみる視点など、様々な角度から建築をみる必要があるということを知った。またその力を培うことが自分にとって大切なことだと思った。

【研究交流について】

文化や研究対象について知らない方々に発表することで、事前準備の際もいかにわかりやすいプレゼンテーションができるか考え、普段と違った視点で自分の研究をみることができた。また韓国の先生や学生から意見をいただいたり、研究、卒業作品を紹介していただくことで、今後の研究活動の参考にできることがあった。

全体で8頁とする。